

厄年の海外旅行(ニューヨークにて)

富士吉田あれこれ

厄年の旅行

人生にはそれぞれ節目があるといわれています。人は、その節目を越えて成長していくもので、それがヤク(厄)でした。MARUBI16でも「年取りと厄払い」ということを紹介しましたが、今回も厄について触れてみます。

厄年とは、もともと陰陽道の説からきている節目にあたる年回りのことで、この年には厄、つまり災難やわざわい(災厄)にあう怖れが多いから諸々のことに忌み慎しんだほうがよいとするものです。そして厄年を無事に乗り切るために大晦日や部分などの夜にお参りをし、餅や赤飯などを配る習俗が広がりました。この厄年、男性は数え年(生まれた年も1年として数えた年齢)で25・42・61歳、女性は19・33・37歳の年回り。特に男の42歳(死に通じる)と女の33歳(惨々)は大厄といひ、その前後の年も前厄、後厄といつて不幸や災難にあわないように注意して日常生活を送るものだとされています。そして時として、不幸に会った場合には「ヤクをくった」などと言います。また、ちょうど大厄にあたる年回りは身体的に

も、社会生活の上でも折り目となる年であるとも考えられるようになり、そのものが強調されてきたものと思われます。

しかしながら、本来の厄年は25歳までのものを厄とされていたようで、それ以後の年回りは「役」であり、社会の重要な担い手として節目にあたる祝い事とされていました。よって災厄には関係がないという説もあります。

この地域では、厄をどのようにして被っているのでしょうか。小正月の行事でオカメやテングのお面を付けた子供たちが新婿の夫婦の家をまわってお祝いする「オカタブチ」がおこなわれます。これと同じ要領で厄年の人も厄をはらってもらいます。また、部分前の都合の良い日を選んで厄払いや厄日待ちを行ないました。これは年取り(部分前)に済ますもので「厄を食べてもらうように」といって宴席をもうけました。また、その座に招待された者は手ぶらで行くものとされていました。部分の厄払いにあわせて市内の新屋地区では厄払

いに着ていくためにわざわざ着物を新調することもあったようです。42歳の男性はオオマイ(大綱)を引いた糸でこしらえた羽織と袴を、19歳の女性はお病の着物を仕立てました。

神社でお祓いを受けた後、厄年の人が神社に参詣してミカンや豆を撒きます。これは現在でもおこなわれているのです。また、神社でのお祓いは別に厄除け地蔵にお参りもします。下吉田にある富士道者の重要な行場であった「曼楽の地藏尊」では近代以降、厄をはらう2月14日の祭礼には地藏の耳の穴があいて厄除けをはじめとするさまざまな願いごとを聞いてくれるとされています。そして特に19歳の女性は必ず参拝して厄をはらうものとされました。また遠くは国中の「湯村の厄除け地蔵(甲府市湯村)」にまで出向くこともありました。

現在でも厄年を迎えるとははらいに行ったり、妻食を設けたりしますが、その意識はたいへん変化してきているようです。大厄の年の男性は、同級生や仲間とちょっとした旅行に

出かけることが多いようです。かつては「伊勢参り」に行くことがほとんどであったようですが、近年は、この厄年の旅行にあわせて同級生や仲間と構成されている「無忌」(MARUBI11参照)のなかで厄年旅行用に積み立てをおこないます。この積み立てた資金をもとに海外に出かけるケースも増えています。「こんな時でもないとなかなか出かけられないから」お金を使って厄をはらうだ」といって、厄払いにかこつけて実行するようです。しかしながら家族の手前、身身の狭くなることもあり、家族同伴での団体旅行とするケースもあります。

こうしてみると市内では、厄払いにかかわる行事がずいぶん重層的に行なわれていることがわかります。何度も何度も厄払いをするのは「身のケガレ」は被せても「心のケガレ」は被えないため(元)それとも富士の御山に対していつも清らかな自分でありたいためのかもしれません。

(芸芸員 布施光敏)

『富士八海をめぐる』(後)

須戸湖

昔は駿東郡の須戸湖を合わせて八海としていたが、今は泉津湖を加えて須戸湖をのぞく。この湖は浮島ヶ原の浮島沼である。今は田地となつてわずかにその形状をとどめるのみ。

明治22年(1889)の静岡県管内全図では原町・一本松新田(沼津市)と中里村・檜新田(富士市)の間に、東西約3.5a、幅約1.3aほどの浮島沼が記載されています。それをさかのぼる明治15年(1882)には沼川石水門が完成していました。その後、昭和放水路の完成によって沼は一気

に水田化していきました。わずかに痕跡が残されています。

ところで、この沼とは別に「須津湖の碑」が、富士市中里八幡町に所在する八幡宮西側の菊池氏住宅の庭にあって、その少し先に須津湖と名付けられた小さな池が存在し防火用水として今日も利用されています。

ここには浮島沼の須戸湖とは別に、もう一つの須戸(津)湖があったこととなります。



須津湖



須津湖の碑

吉原

吉原の手前で沼川の川合橋を渡る。江戸から数えて一四番目の東海道の宿場。東は原宿(沼津市)西は蒲原宿(蒲原町)である。

この宿場は慶長6年(1601)に成立したものです。当初は鈴川村(元吉原)に位置していましたが、津波や

漂砂などの自然災害を受けることが多く、中吉原(新宿)をへて、現在地(新吉原)に移転しました。吉原宿に北接する伝法には富士下方五社の一つ富知六所浅間神社があり、鎮座地はもと三日市場といひ、三日市場浅間社と呼ばれています。戦国期から江戸時代末まで今泉の薬泉院が別当で、この社を管掌していました。



吉原宿

水神森

東海道の岩淵を東に向かい富士川を越えたところが水神森である。水防の拠点となる雁堤を守護する水神として信仰されている。

富士川橋を渡って、富士市に入ると水神森があります。水神社の入口には、宝暦8年(1758)に造立された「富士山道」の道標が残されています。道は雁堤を迂回して、岩本に向かい、凡夫川(濁井川の支流)を越えて富士宮市大宮へ進んでいきます。雁堤の東端部を左折して、そのまま北上していきます。東名高速道路の手前に日蓮宗富士五山の一つ、岩本実相寺への分岐があり、そこに大きな題目塔が建てられています。さらに北上して、そのまま道なりに右折します。凡夫川が濁井川に流入する場所、龍遊橋付近の河原は富士登拝者が寝をした垢離場だったところです。



水神森



富士山道の標識



岩本実相寺入口付近



凡夫川の垢離場

大宮口

大宮口は南口の一つで、また、村山口ともいう。ここから登山するものは、まず二郡大宮村へ出る。この地に大宮浅間がある。そもそも当社は式内社であって、駿河国一宮、また、総社を兼ねている。平城天皇の時代に大宮より五十町ばかり奥にある山宮をこの地に移して国常立尊、山杵命を合わせて祭祀した。その後、嵯峨天皇の時代に正一位を授けられ、慶長年間にもまた造営があった。神主を大宮司といひ、別当を宝篋院という。

大宮口は南口と呼ばれています。また、この大宮口はその先にある登山拠点の村山に通じていることから村山口とも呼ばれました。東海道方面からの登山者は、まず大宮に出て本宮浅間(富士山本宮浅間大

社)にお参りをします。この社は、平安時代の年中行事や制度を記した繪巻物、延喜式の神名帳に記載された式内社であり、また駿河国の一宮となっています。現在の社殿は慶長9年(1604)の再建のもので

す。神職の中心を占めた大宮司と、神社に設けられた神宮寺である宝篋院を支配した家はよそに出て、二軒とも残っていません。この社から北へ約6d上った山宮の地に山宮浅間神社が鎮座しています。



富士宮市大宮



浅間大社



村山口

そこから村山浅間の社に至る。当社は崇行天皇の時代、日本武尊が東夷征伐のとき、この地において駿河の賊徒が尊を焼き討とうとして、木花御姫に折檻を入れて祀らせたとのことである。別当は不二郡村山郷の大鏡坊辻之坊、池西坊だという。これより二合目に至って、そこから左に雲切不動尊道があり、頂上は表大日堂の場所へ出る。

大宮から北東に約7分進むと村山に至ります。村山には大日堂と並んで浅間神社が祀られています。神社を支配した別当は、「大鏡坊、辻之坊、池西坊」で、あわせて村山三坊とよばれていました。村山口はここから富士山内へ入って行きません。登山道の二合目が雲霧不動尊へ参拝する不動尊道の分岐点となっていました。この道は途中で途切れています。村山登山道は頂上の浅間大社奥宮(表大日)へ登り上げる道となっています。



村山道の道標



村山浅間神社



村山口登山道



村山の西見付

外神風穴

北山本門寺大門の横通りを行って広野の中に杉の大木が残っていると、そこに風穴がある。穴の深さはわずか十間(約30m)の深さだが、書中にも雪が残る。これを龍門争土岩屋(りゅうもんそうどいわや)といって、前に石杭がある。この処から大宮まで二里。

重須(むろす)にある北山本門寺の横通り(国道469号)を東方向に行き、途中を南に曲がった池田公園の中に外神風穴があります。現在は、万野風穴(まんのふうあな)の名称で国の天然記念物に指定されていますが、崩落の危険があるために中には入ることができません。この場所から大宮までは約8分を測ります。



外神(万野)風穴

『富士八海をめぐる』(後)



白糸滝/富士山道しるべ

浄土人穴

山麓の「富士の人穴」は世間の人の知るところである。古書に出てくるのは、『東鑑』十五に建仁三年六月三日、将軍家が駿河国富士の狩會に渡御して、その山の麓に人穴という大谷があった。そのところを探検したのが仁田四郎忠常の主従六人であるという。この場所を富士郡人穴窟とも猿頭出作ともいう。人穴窟の住人赤池善左衛門が、天正十一年五月、甲斐御陣のときの功でこの地を賜って、今は村長となっている。この人穴も赤池氏の管理するところで、参詣する人はこの家に来て役銭を納めている。

洞窟は甲斐に通ずる大道の北の方角にあり、前に鳥居がある。穴の口は石垣で、石段を下りて穴に入る。口径は一間半を測り、入口が低い。穴の下に入って、幅三、四間ばかり。高さは二間くらいのところ。六、七尺ばかりのところもある。中に六尺四方の小屋がある。行者が籠るところである。入口の二丁ばかりが穴が狭くなる。これより奥には入るものがない。地上は材木を二行に並べて、その上を

歩行する。もし、この木を踏み外せば、水が膝丈におよび、その冷たいことは氷のようである。穴の左右に銅像、石像がある。案内者は茅を束ねて松明とする。また、穴中の石や砂を外へ出すことを禁じている。穴の口より西北の房らに大日堂がある。行者角行がここで亡くなったところとして、その弟子がこの堂を建てた。角行の墓は大日堂の西北にあり、付近に弟子の墓石が数本ある。この前に石祠があり、角行をまつている。角行は肥前長崎の生まれで、正保三年六月三日に死んでいる。享年百六歳だったという。吉田からここまで真っ直ぐ道をとると九里。本栖からは四里八丁ある。白糸滝へ一里八丁、大宮へ高道で五里ある。

また、この場所は行者角行が参籠したところで、そのほかの行者の石碑が数本ある。

白糸滝

水原山川口、精進、本栖等の湧水が地中深く伏流して井田寺靈照寺の境内に湧き泉の一つとなってここへ落ちる。大滝が一つとそのほかの滝が数間の間に糸のように流下するのをもってこの名前をつけた。そして、この水はどのような旱魃の年でも絶えることがない。長興村をへて富士川へ落ちるといふ。この地は景色が美しく古人が多く、詩人に詠んだ。ここから人穴へ一里八丁、外神へ二里、大宮へも二里を測る。

白糸滝は富士山西麓の湧水を集めて伏流し、やがて滝となって流れ落ちます。この滝は無数の糸を垂らしたように見えることからそのように名付けられました。滝は約200mの落差があり、芝川町長興で富士川へ流入しています。ここは風光明媚で、多くの文人墨客が詩歌に詠み、また描いてきた名勝地です。



人穴

富士山麓には火山活動によって形成された風穴が多数あります。人穴もそのような溶岩洞穴の一つで信仰の対象として重要な場となっていました。上井出の一本松を分岐して県道71号を北上し、原中の道を行くと周辺の地形から一段低い窪地に人穴の集落と溶岩洞穴の穴が存在します。『吾妻鏡』の中に、鎌倉幕府二代将軍源頼家が新田忠常主従六人に人穴を探索させ、忠常は従者四人を失いながら一昼夜

をかけて人穴探検から帰還したことが記されています。また、古老が浅間大菩薩の御在所だといったとし、当時すでに人穴は神聖視されていたようです。江戸時代初頭には、長谷川角行がここで修行し、亡くなったので弟子が大日堂を建立し、墓も残されています。

近代になって、人穴は西富士演習場となったので集落が移動させられ、その後再び現在地に集落が戻り、現在に至っています。

本栖湖

八代郡本栖村にある。土地の人は「古根龍神」という。ここに藤武神の社がある。孝安天皇が富士山を開かせたときの勳進だという。祭りは四月初申の日。これから志比礼湖へ五里。

本栖湖は西八代郡上九一色村と下部町にまたがって存在し、古根龍神と称されました。藤武神の社があります。ここから精進湖をへて志比礼(四尾連)湖へ20㍥の道程となります。



本栖湖

精進湖

同じく八代郡の精進村にある。旧名を内湖という。土地の人はこの湖を「出生龍神」という。この湖は貞観年中(859-868)の山崩れ(噴火)のときに流石が湖を埋めること千余丁、今はその一隅が存在するという。ここから本栖湖へ一里。

精進湖を出生龍神ともいいます。864年の貞観大噴火に溶岩の流入を免れた一部分が湖水として残存したといわれています。

精進湖には赤池という場所があります。ここはかつての精進湖の広がり的一部で、勳進富士山に供える水を汲んだ場所と考えられます。中道往還は女坂峠を越して古閑、中道方面に通じています。



精進湖



四尾連湖

志比礼湖(四尾連湖)

同郡山家村にある。土地の人は「尾崎龍神」という。これは精進西方の古閑を下り、五里くらい行った山の中間にある。ここからまた精進に帰ることになる。

また、山を真っ直ぐ下って、市川へ出て藤川を渡り、身延山へ参詣するものもある。本栖から根原をへて八穴村へ出る道のりが四里八丁。吉田村より真っ直ぐに道をとって九里あり、馬籠龍崎が二朱二百文である。

志比礼(四尾連)湖は市川大門町山家に位置しています。精進から女坂峠を下っていくと、嶺ヶ岳の中間に湖がみえてきます。ここには子安神社が祀られています。八海めぐりは志比礼湖と精進を往復するルートになりますが、そのまま市川へ下り、富士川を渡って身延山へ参詣することもできます。

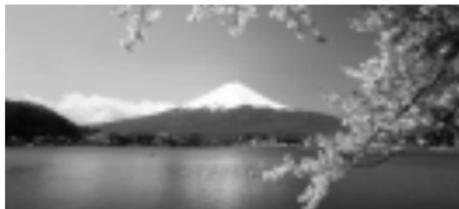
『富士八海をめぐる』(後)

西の湖(西湖)

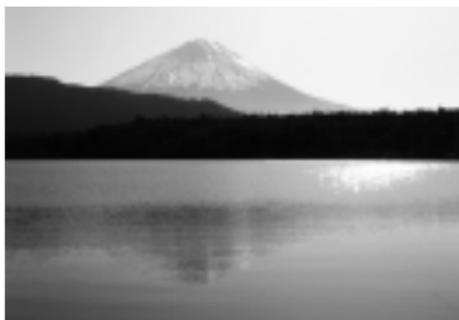
当国八代郡、長浜村の西にあり、旧名を石花湖という。海中に瀨があり、壁石が美麗なことから多くの人々が石花という。甲州の太湖である。土地の人は「青木龍神」という。湖中を向こうへ一里わたると、岩面の鐘道像があり、夢想国師の筆になる

という。ここから精進湖へゆく道を青木ヶ原という。精進湖へ四里。

西湖は河口湖西岸、長浜の西方にあり、かつて剡の海(石花湖)とよばれました。貞観6年(864)の噴火で長尾山(富士山の側火山)から流出した溶岩によりこの剡の海を分断して西湖と精進湖が形成されました。



河口湖



西湖

川口湖(河口湖)

同郡川口村にある。土地の人は「水口龍神」という。甲州第一の太湖で、湖辺から富士山を眺望すれば、その景色は本当に美しい。

当所に浅間社がある。もっとも大きな社で、神主は宮下氏、師範は数十軒ある。また、甲府より登山するものは三坂峠からこの地に至る。御師の家に着し、そこから大石、長浜をへて空沢(當代堀)へ出て胎内道を登る。吉田村からここまで二里、西の湖へ一里。

山梨県でもっとも大きな湖で、ここから望む富士山の景観はとくに優れています。河口にも浅間神社が鎮座しています。

かつて中部高地や山梨県内の国中方面から富士登山する人々は御坂峠を越えてこの地に着き、河口御師の宿坊に宿泊して翌日に富士山へ向かいました。ここから上吉田までは約8kmを測ります。

泉津道・泉津湖(泉瑞)



泉瑞

中の茶屋より東へ町ほど行けば湧水がある。これを泉津という。近時八海の一つに加えられた。土地の人がいうには、源頼朝が富士の御狩のときに家来の縁の碇きをいやすため浅間社に祈願をこめて腰をもって岩を穿ててこの水を得るといふ。故に仙瑞ともいふ。夜間には水量が二倍になるので夜倍の水ともいふ。この流末は浅間社の御手洗川へ出ると伝えられる。

土地の人は「仙水龍神」という。吉田村からの登山道の部に詳しく記したので、ここでは省略する。

中ノ茶屋から東へ折れてしばらく行けば、泉津(泉瑞)という湧水が

あります。江戸時代後期に須戸湖の替わりに富士八海の一つに加えられました。源頼朝が富士の巻狩の時に水を得たという伝説の湧水であり、その水は浅間神社へ引かれています。

この場所から弥生時代後期～古墳時代前期の台付塚の脚部が出土しており古代以前の遺跡としても知られています。

本稿を通じて、こうした私たちの身近にある文化遺産の価値を理解し、これら全てが先人たちの残したかけがえのない財産であることをあらためて認識していただければ幸いです。(学芸員 堀内真)



博物館からのお知らせ

平成15年度年間行事予定

3	14年企画展『折りと人形』	
4		調査学習『市内の石造物を調べる』(通年)
5		歴史散歩『市内下吉田の歴史をもとめて』(5月)
6	企画展『富士登山の基点 一 諏訪森と浅間神社一』	体験学習『ソギソクリ作り』(6月) 体験学習『縄文土器作り』(6~7月)
7		体験学習『縄文土器作り』(7月)
8	企画展『外国人のみた富士山』	
9		歴史散歩『富士八海をめぐる』(9月)
10		体験学習『縄文式魚釣り』(10月)
11		体験学習『ソギソクリ作り』(11月)
12		
1		
2	企画展『手織りのあるくらし』	
3		



刊行図書

企画展図録『富士の信仰遺跡』

富士山を遺跡としてとりあげた企画展『富士の信仰遺跡』の図録です。吉田口登山道の発掘調査成果を中心に山内から出土した遺物や、各登山口の歴史などを紹介しています。

2002年8月発行/A4版・27ページ
価格800円



刊行図書

博物館叢書『富士八海をめぐる』

叢書第2弾。前号『富士山道するべ』を底本とした江戸時代末期の「富士山道するべ」をもとに、その続編として『富士八海をめぐる』と題し、かつての八海めぐりルートを追跡した富士山の麓をぐるっと一周するためのガイドブックです。

2003年3月発行/A5版

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れる様子の「転び」が転化(変化)したものとわれています。

富士吉田市歴史民俗博物館

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間 / 午前9:30 ~ 午後5:00 (午後4:30迄入館可)

休館日 / 月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(日曜

・祝日を除く)、12月28日 ~ 翌1月3日

観覧料 / 大人 300円(団体 240円)

小中高生 150円(団体 120円) 20名以上に適用

交通案内 / 中央自動車道河口湖ICより車で10分

富士急行線富士吉田駅より山中湖方面

バス15分、サンパークふじ下車



MARUBI 編集後記

某館で刊行している「たより」には4コマ漫画が掲載されていました。それはなかなか表に出せない芸芸の苦悩が見え隠れする素晴らしい作品で私自身とても楽しみにしていました。しかし、ここ数年、どのような事情からか、紙面から見かけなくなっており、とても残念におもっています。先日の「たより」に復活してとても感激しました。私たちが読者が待ち焦がれていたような紙面を作っているよう頑張りたいものです。(F)